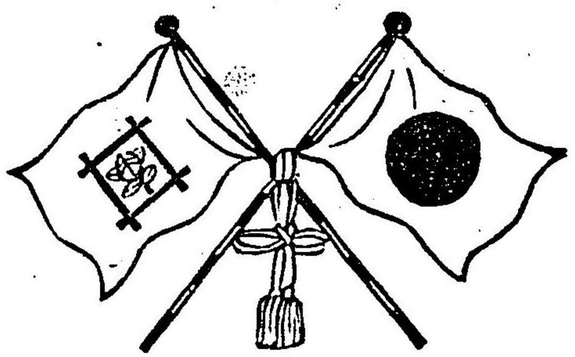
A-99

149
750



呈

日蓮宗大意

京都日蓮宗

報國會

（非賣品）

信仰箇條

國依レ法而昌、法因レ人而貴、國亡人滅佛誰可レ崇、法誰可レ信哉、」

（世間益）

諸佛ノ誠諦得道ノ最要ハ只是レ妙法蓮華經ノ五字ナリ檀王ノ法位ヲ退クヤ龍女ガ蛇身ヲ改メシモ唯五字ノ致ス所ナリ」（爲人益）

百千萬之人、被レ蕩レ惑多迷佛教、好レ傍忘レ正善神不レ成レ怒哉、捨レ圓好レ偏惡鬼不レ得レ便哉、不レ如修彼萬祈禁比一凶矣」（對治益）

我レ日本ノ柱トナラン我レ日本ノ眼目トナラン我レ日本ノ大船トナラント誓ヒシ願破ブルベカラス」

（入理益）

特47
787

日蓮宗大意緒言

北清の擾亂は端しなく地球全盤の一大問題の導火線となり續て列國の出征となり今や時局の大勢は智識の知り得る所にあらず此時に際し一葦帶水の吾國の體動は列國環視の中心にして聯合軍に在て吾軍の重任たる今更言ふを俟たず此時に當て國民たる者覺悟なくして可ならんや

就中日蓮宗祖の誓願たる我日本の柱とならん我日本の眼目となちん我日本の大船とならんとの誓旨を體し立正安國の宗門に在る吾曹一日も忽緒に附する事を得ず依て本宗緇素相謀り本會を組織し國民の聲援を助けん事を期す

本會會則摘要

第一　名稱

一京都日蓮宗報國會と稱す

第二　目的

一追弔慰問恤兵都て報國の主趣に出り國民の聲援を奬勵するを目的とす

第三　位置

一本部を本市二條本山頂妙寺内に設く

第四　職員

一本會職員を左の四種とす

理事長　一名　理事　若干名

會計　二名　記　若干名

第五　會員

一本會々員を分て四種とす

名譽員　特別員

正會員　贊助員

第六　會費

一本會の目的を達せん爲め會員たる者は左の義務を負ふものとす

名譽員　金五圓　特別員　金壹圓

正會員　金五拾錢　贊助員　金參拾錢

本會の主旨目的に基き第一回戰歿將士追弔會を修し第二回の事業として今回慰問使を派遣して其功勞を安慰し併て軍隊兵士をして精神界の一隅に新氣運を開き純化を補けん爲め立正安國の要義を平易に叙述し軍隊に配與せんと欲して其顚末を卷首に書す

明治三十三年九月

編者識

第一章　日蓮宗起原及沿革

夫れ釋迦牟尼佛の敎を設るや衆生の機に隨ひ根に應じて種々の敎門を開き小大權實等幾千萬の多きに至るといへども其歸する所の要は前權後實の循誘を以て到底大涅槃の妙處に至らしむるに在り、故に最後に妙法蓮華經を說き而して釋尊自ら一代所說の諸經已今當の三說を擧て之を較量し、妙法蓮華經を以て第一とし（法師品）出世一大事の因緣とし給ふ是れ獨り釋尊のみ然るにあらず三世諸佛の說敎の儀式皆然り（方便品）是を以て如來の滅後正像末の三時、四依の弘經も亦其規を守り敢て其序を失はず、故に正像二千年の間小大權實遺囑の順序を踐で諸大人師之を各處に弘通せり、然るに氣運已に末法に屬し、正く本門妙法蓮華經の流布すべきの時に際し宗祖日蓮大士、諸宗流布の後を承け、大日本　後深草天皇の建長五年（即西曆一千二百五十年）四月初めて本門の妙法蓮華經を弘通し給ふ是他なし釋尊の設敎の規則を遵奉し釋尊所立の眞宗を祖述するのみ、爾來門弟信徒日を逐て倍徙し寺院年を追て增設す

後醍醐天皇の元亨年間法孫日像、宗祖の遺囑を奉じて上洛し始て京都に妙宗を弘通し大

に法運を啓き、時に　光明天皇の貞和年中に至り漸く盛に、　後花園天皇の嘉吉寛正の頃に至つて益に其盛を極む

後奈良天皇の天文五年、天台宗と宗論の末、彼徒兵を起し火を放て侵擊し京都本宗の諸本山悉く焦土となる、世に之を天文法亂と云　後陽成天皇の文祿慶長年間に京都妙壓寺の日奥、不受不施の義を唱へ　後水尾天皇の寛永年中、武州池上本門寺の日樹、再び之を主張し宗内大に動搖し、本宗の大山巨刹數十ヶ寺之が爲に廢滅す、此の天文法亂と兩度の不受不施とを以て本宗の三大厄と云ふ、蓋し是時開宗を去ること三百餘年、宗制久ふして弊を生じ是の如き害毒を釀生するに至れり、是に於て日重日乾日遠の三師首として關東關西に十數箇所の檀林を創立し大に天台學を興して宗乘を扶け時弊を矯正せしを以て學風一變し宗規を更正す、世に之を中興三師と稱す、尋で草山の元政等の諸師輩出し世と共に進化し宗風大に振ひ海内に寺院を增設すること其數甚多し、信徒漸く全國に遍く亦昌盛を致す、之を第一の沿革とす

爾來三百年宗門漸く治平に慣れ、諸檀林ともに軌則を墨守して變通を知らず、學者天台學に流れて更に宗學あるを忘れ、大に立宗の原意を失す、是に於て近年東都に一妙院日導、加州に優陀那日輝あり、大に之を慨嘆して盛に宗學を喚起せり、明治壬申、教部省設置已來從前の諸檀林を廢止し更に宗教院を東京に設立して學制を一變し專ら宗乘を研究せしむ、同十八年宗制寺法を編成す、之を第二の沿革とす

是の如く僧侶寺院の盛衰ありといへども在家信徒の輩に至ては開宗已來六百有餘年間漸進增殖するのみにして曾て衰況を見ず、之を本宗の起原及び盛衰沿革とす

第二章　日蓮宗宗祖畧傳

宗祖日蓮大菩薩幼名は善日麿、姓は藤原、大織冠鎌足公の裔なり、父は貴名二郎重忠、母は清原氏、　後堀河天皇の貞應元年二月十六日安房國長狹郡小湊浦に誕す、即ち如來滅後二千一百七十一年（西歷一千二百二十一年）なり、十二歲同郡清澄山に上り法印道善房を師として密乘を學ぶ、延慶元年十月八日薙髮受戒す、時に年十八なり、是より天下に周遊し遍く英哲に接して道を求むるに諸祖の宗義に就て疑ひなき能はず、仍て入藏通覽すること凡そ五回、遂に釋迦所立の宗を發悟し新に一宗を建立し、專ら妙法蓮華經を弘む、實に　後深

草天皇の建長五年四月廿八日、時に年三十二なり、同年八月相模國鎌倉に赴き名越の松葉ヶ谷に居る、法華堂と名く、文應元年七月、立正安國論を撰述して北條時頼に呈し佛法の邪正を論じ他邪歸正を諫む、時頼聽かず、弘長元年五月十二日、讒に依り伊豆國伊東に配流せられ、同三年二月赦に遇ひ、十月桑梓に歸る、偶々母の死に値ふ、大士悲哀に堪へず、誦經新修し給ふ、母乃ち蘇生し更に命を延ること四年なり、文永五年大元蒙古國の使來る、大士内憂外患の原由を論じ益々立正安國の旨を激論す、讒者猜嫉し、同八年九月更に書を以て極諫す、是に因て斬に處せられしが、故あり改て佐島に謫す、在島中に開目鈔、本尊鈔等を著はし十界の大曼荼羅を圖して別頭の教觀を表彰す、本化の妙宗是に於て大に顯はる、故に大士自ら言く佐渡已前の書は猶佛の爾前經の如しと（三沢鈔）、同十一年二月十四日赦に遭ひ、四月八日北條の家臣頼綱に對して前諫の旨を縷述す、頼綱慰諭して曰く自後折伏を廢して天下泰平を祈らば城西に愛染堂を建て寺領一千町を寄せて衣鉢の資に供せんと、大士三諫して聽かれざるを以て衣を振て去る、時宗々牒を與ふ、六月十七日甲斐國身延山に遁れて復世に出でず、是より先き文應元年下總國若宮の邑主富木五郎胤繼邸内に法華堂を建て大士を請して一百日間説法せしむ、即ち今の中山法華經寺是なり、文永十一年五月北企三郎能本、大士の歸倉を歡迎し一宇を創設して開堂供養す、今の長興山妙本寺是なり、同年武州池上宗仲、その家を捨て寺と爲す、大士長榮山本門寺の號を賜ふ、弘安五年十月十三日池上に於て入滅す、年六十一、法臘四十四、茶毘して塔を身延に建つ、遺文三百九十餘編あり、世に刊行す、入室の弟子凡そ四十餘人あり、日昭日朗日興日向日頂日持を六上足と云

第三章　日蓮宗宗名を釋す

妙法蓮華經宗は教主釋迦牟尼佛の所立なり、故に所依の經典に據て法華宗と號し、能弘の人に依て日蓮宗と稱す、而して法華宗の號は宗祖の自稱にして、且つ法華宗號の綸旨現存せり、是を以て維新以前は天台法華宗に簡別して日蓮法華宗と稱せり、今單に日蓮宗と云ふものは日蓮法華宗の畧稱なり

第四章　日蓮宗義大意

器傾けば水溢る國家穩かならざれば身安からず故に法華本門の大教は國土常住を明かし

て衆生本有の果報を示し先づ生前を安んじて更に没後を扶けしむ是以宗祖大士の言を建るや立正安國を以て一宗弘化の實績とす夫國は法に依りて昌ん也法は人に依りて貴し然れば則國家の盛衰は敎法の正邪に由るか須く正法を弘て國家の清寧を祈求すべきなり所謂正法とは何ぞや法華本門壽量の妙法蓮華經是也衆生本有の妙理を明かせる法門なるを本門と云ひ壽とは功德也量とは詮量也此妙理に無量の功德を備へたる事を詮量せる經なる故に本門壽量の妙法蓮華經と云なり所謂衆生本有の妙理とは佛智所見の實相にして即一切衆生自爾天然の相貌なる者唯一法界廬融無差にして全く十方三世の十界の依正色身を以て一人の身相とし亦以て一心の常相とし永く衆生差別の妄見を亡泯せる者なり抑も此妙理は竪は三世横は十方世界に亘り上は日月星辰より下は山河大地草木瓦礫等に至り其中間に命ある貴賤貧富正邪智愚老少男女の人類より禽獸蟲魚の末に至るまで凡そ森羅の萬像一も殘さず皆我一身の法界なり一念の三千なりと通達解了し我が一身の法界の萬像と同一不二にして都て物我の間に於て一點の隔異なく我即物物即我なる是れ之を法界の大我と云ふ之を法華に明かして我成佛已來甚大久遠と說けり

夫れ釋尊年三十の時始めて此大我を覺悟し直に衆生に示さんと欲し試に華嚴經を說てその一端を示すと雖ども衆生の狹量なる之を體達する能はず止を得ず四十餘年各脩各成差別の方便を說て衆生の機緣を調熟し年七十二にして始めて本懷を暢ることを得て先づ法華開演第一に唯佛與佛乃能究盡諸法實相と說けりその諸法實相とは十界の諸法眞實の相貌と云ふことにして三界の依正十界の諸法みな是れ本有無作の三身如來常住不滅一體不二なる相を云なり衆生は諸法に於て異相を見諸佛は諸法に於て同相を見る迷悟の見に因て諸法に同異の相を作すといへども法は固より同不同の異なるなし而して衆生の見處の異相は衆生の妄見にして法の本理に非ず但だ佛の見處の諸法の同相即是れ法の本理亦是眞實相なる事を示して諸法實相と說くなり仍は衆生の了せざるを想ひて更に此諸法實相の義を釋尊自ら我一身に結攝し示して曰く今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子と夫れ山河大地千草萬木皆我一身なるが故に三界は皆是れ我有なりと云ひ又十界の衆生は皆我影像塵形にして都て我一身の分身散體ならざるなきの理を示して其中の衆生は悉く是れ吾子と說けるなり如是の妙理は今日始て覺悟上より見る處なる故に今此三界と云ふ今の一

字は昨迷今悟の分界を示せるなるべし故に經に如來如實如見三界之相と云へり知斯知見上より論せば始覺の妙理となれどもその妙理の實體は固より本有常住の本覺三身如來なることを明かして成佛已來甚大久遠と云ふなり

されば文六四八の釋尊を認めて之を佛陀なりと云は衆生妄見の佛界にして佛の眞實相に非ず所謂眞實相とは十界三千の依正色身非情草木虛空塵刹森羅萬象みな我一身なり一念の三千なりと通達覺悟せる毘樓遮那徧一切處の本覺三身如來を佛陀の眞實相と云なり釋尊既に是の如し一切衆生も亦復是の如し釋尊より論せば三界の依正みな釋尊の一體なり衆生より論せば衆生所有の三界なり衆生所有の悉是吾子なるべし佛と衆生と一體不二の妙體にして均しく遍一切處の無作三身の覺體ならざるはなし故に經に心佛及衆生是三無差別と說くは全く此妙理を示せるなり

既に上來所說の如く衆生卽佛身なれば衆生所住の國土も亦卽諸佛所住の實報の妙土なり決して衆生所住の三界の外に諸佛所住の妙土あるにあらず故に經に我常在此娑婆世界と云ひ常在靈鷲山と云ひ今此三界皆是我有と云ひ如來如實知見三界之相と云へり皆是れ娑婆卽寂光を明せるなり一の三界娑婆なれども衆生より之を見れば三界無安猶如火宅と說き佛より之を論せば寂然閑居安處林野と演べ又大火所燒時の衆生の三界なれども佛に於ては我此土安穩天人常充滿と云へりされば均しく三界にして佛陀衆生の所見を異にするのみ所居の三界に於て二あるに非ず今夫の潤橋風雪の如き詩人に於ては無盡の雅興あれども旅客には多少の艱難なるべし一の風雪にして感覺を異にす知見一たび開くれば國土みな妙境ならざるはなし故に釋尊出世の一大事とするは開佛知見使得清淨故出現於世と云て人々の知見を開悟せしむるに在るのみ衆生若し能く知見一たび開けば三界の實相卽常住の妙土を見るを得ん故に經に曰く若善男子善女人聞我說壽命長遠深心信解則見佛常在耆闍崛山又見此娑婆世界其地瑠璃坦然平正閻浮檀金以界八道寶樹行列諸臺樓觀皆悉寶成其菩薩衆成處其中と說けり是れ娑婆國土に於て佛土の圓妙莊嚴を感見するを得るを以て法華圓頓信解の成績とすされば娑婆妙土の實報を示して衆生成佛の結果を示し安身立命の基を立て一生成佛の本懷を達せしむるを法華の妙宗とす故に曰く法華本門の大敎は國土常住を明かして衆生本有の果報を示せるなりと

故に宗祖一宗建立は初に當て先づ立正安國論を制して之を時の執權北條時頼に建言して法華の正法に歸依して國家の靜謐を祈求すべきこそ方今の時に應じ機に適ひ國家を安穩ならしむべきの急要なる事を論述し法華弘通の確標を立定す何となれば夫れ一身の安寧は必ず一家の無事に因り一家の安寧は亦必ず一國の靜謐に因る國にして靜謐ならざれば一家一身の安寧何ぞ得べけんや況や三界は佛國なり娑婆は寂光なり三界棄つべきに非ず娑婆何ぞ厭離せんや惜ひかな但だ衆生の迷へるが故に常樂の淨土に居り乍ら淨土を見ず貪瞋癡慢の煩惱になやまされ生老病死の苦海に陷り大火所燒時の三界に輪廻せること是自ら求めたるの穢土苦惱の果報にして娑婆國土の因より菩惱あるに非ず此の世界の實體は釋尊法華に正しく示して我此土安穩天人常充滿と說き玉へば固より安樂淸淨の國土にして天人常に充滿し憂悲苦惱のなやみなく生を迎へ死を送り人間一生の能事を全うして一點の憾みなく現世安穩後生善處の佛說の如くあるべかりしを只だ衆生の思ひ習はせる迷ひにて憶想妄見の網の中に陷り自ら此惱を致せる事こそ哀れなれ人若し佛の知見を開けば世界は自ら安樂淸淨の國土と現れて佛の境界に入り常寂光の妙土となる故に速に佛の知見の覺を開いて自受法樂の妙果を得んと願ふべし苟も佛の知見を開かんと欲せば法華本門の妙經に依りて求むべし法華經には欲令衆生開佛知見使得淸淨と說けり又眞實の樂土を見んと欲せば宜しく之を示せる經に依らずして亦安くに得べけんや法華經に佛の住處を說て我常在此娑婆世界と定め而して此娑婆は決して苦惱の世界に非ざる事を說明して我此土安穩と示し玉へば今の時に當て宜しく專ら法華の妙理に歸依して必ずや風枝を鳴さず、雨塊を摧かず五風十雨鼓腹擊壤の國光を見るを得て三界眞に佛國なるの實境を感見し四海みな兄弟の安寧を全ふし海內に遍して一の不幸に陷る者なく自他ともに安く同じく寂光常土に安住するの結果を得るを以て佛道脩行の本意とすべし

夫れ萬民の安寧を謀れば一身の安寧は其中にあり一人の安寧を謀れば萬民の安寧得べからざるは勿論一身の安寧に於けるも亦必とす可らず一人の安寧を求むるを二乘と云ひ永不成佛の道とす萬人共樂の道を求むるを大乘と云ひ皆成佛道と云なり皆成佛道の法こそ吾人の正しく求むべき法と雖も之を世に施さんとするに頗る難し今世上一般を概見するに智者常に稀にして愚者太だ多し況や踐且貧にして眼に一丁字なき者は心も亦隨て公正

の志なき者なり斯の如き人は一身の安寧を圖るだに力猶は足らず何ぞ萬民の共樂に遑あらんやよしや大道を以て之に提耳し懇説すとも扞格して心に入らざるべしさりとて之に告るに實を以てせざるは佛の本意に非ず如何せば可ならん況んや此經を弘通するには怨嫉多かるべき事は佛自から經に説て如來現在猶多怨嫉と明かせり佛の在世さへ此經弘通には艱難を極む況や滅度の後をや滅後も亦末法の濁世に於てをや理必ず化しがたきに在り所謂三類の怨敵なるもの競ひ起ること知るべきなり是末法弘經の難き所にして連化の大士手を拱し獨り本化の菩薩のみ能く專任し弘通するに堪たりとする所以なり故に宗祖建宗の初に先づ大願を立て曰く善に付け惡に付け法華經を捨るは地獄の業なるべし我大願を立てん日本國の位を讓らん法華經をすて〻觀經等に就て後生を期せよ父母の頭を刎ん念佛申さずばなんどの種々の大難出來すとも智者に我が義を破られずば用ひじとなり其外の大難、風の前の塵なるべし我日本の柱とならん我れ日本の眼目とならん我れ日本の大船とならん等と誓ひし願やぶるべからずと斯く大願を立させ玉ふて建立する所の本門法華の正法なりその正法とは何ぞや曰く三あり一には本門の本尊二には本門の題目三には本門の戒壇なり是を本門壽量の三大秘法と云ふて宗祖大士の一期の本懷とし玉ふ所の法門なり

此の三秘の大法は既に宗祖の本懷たる法門なれば固より一席の談話に盡すべき者に非ず今但だ其一端を摘要して示さば本尊とは本門の教主釋尊卽ち十界の大曼荼羅是なり其中央に圖する南無妙法蓮華經の七字之を總體として其左右に細列する諸尊卽ち十界なる者を別體とす曰く釋迦牟尼佛多寶佛佛界上行無邊行菩薩菩薩界舍利弗目連聲聞界緣覺界梵釋四天天界阿闍世王人界阿修羅修羅界龍王畜生界鬼子母十女餓鬼界提婆達多地獄界等の十界是なり夫れ十方三世の諸法廣しと雖ども十界常住の相に過ず故に直に十界を以て法界の萬法を攝して一の大曼荼羅とす此大曼荼羅は久遠本佛の實體を圖出せる者にして形相莊嚴の佛陀を指すに非ざるなり如來最初道場に於て覺悟し玉へる所の本體は十方三世に周徧貫通して十界の色像三千の森羅無盡に繰起し圓融無碍の妙體にして一切衆生の四大六塵みな如來の法身に非るなく一切衆生の五陰三業皆如來の報身に非ざるなく一切衆生の四體六根皆如來の應身に非ることなし一體の妙法にして種々の異相を顯し事々物々互に融し互に卽し三千の

諸法未だ曾て一點の隔異なきを本覺無作の三身如來と云なりされば夫の提婆の瞋恚も龍女の愚痴も餓鬼の貪欲乃至十界各々の全分をその儘併て一の久遠本佛の全身なりと示したる本尊なり譬へば川流江河の諸水の異なるも大海に歸入しぬれば同一の鹹味となりて復た差別なきが如く十界の諸法も亦た是の如く如來の眞如海に會入し佛の知見を以て之を見れば一切みな遮那の妙境本覺の妙智ならざるなきなり

斯く本尊は釋尊の實體に就て示したるも其本意は凡夫一身の本體も亦是の如く三千常住十界圓具の佛身なることを見せしむるの妙鏡なり宗祖の云く所詮妙法蓮華經の當體とは何物ぞ法華經を信ずる父母所生の肉身是なりと敎へ玉へるが如く苟も此妙鏡の本尊に向つて我身を觀照せば行者の一色心は全く是久成本有の妙體にして法界の萬法三千の森羅は全く自身の分身散體なれば中央の題目は但だ是行者自己の一色心を表章せる本體にして四圍に羅列せる諸佛衆像四衆八部は並に自身の分身なり其外十方三世の十界の依正森羅の諸法は自己一色心の全象なることを開示せる本尊なりと知るべし

既に十界同一の體なるが故にその體より繰起する善惡の心も亦隨て十界に徧ねく平等に感通す故に一念も佛心を起せば十界ともに佛心となり一念も地獄の心を起さば十界ともに地獄の心となるなり一念の微と雖も感通の廣く且つ速疾なる事は例へば一掬の水たりとも之を口に含むに全身ともに潤ひ又た兩掌の綴に火鉢に向てその暖已に雙踵の末まで に通ずるが如し是れ他なし其體一なるが故に其用亦遍く感通するなり故に一念の微それ愼まずんばあるべからず夫れ公私の二心は善惡の分岐する處なり今それ布施愛語の如きは善なる者なれども若し私心より之を爲せば其極遂に惡に陷ることを免れず瞋怒は人の惡とする所なれども公正に出でしむれば其瞋怒たるや自他ともに大に善利の結果を得るの幸福に至るべし大底物我の情執强き者は思慮多は私に出で物我の情執かろき者は思慮多は公正なる者なり例へば一身の上に於て計畫をなすが如き左手の爲に利を計るも其思慮必ず全身に及し右手の爲に計るも亦爾り未だ左を損じて右を益すが如き利己主義の偏情をなさゞるは左右とも一身なるが故なり凡そ日用常作の際に於て物我の情執を離れば其思慮必ず公正に出る者なり故に敎を設るや勉て人をして物我の情執を去て少欲知足普賢の行を修し自他ともに安寧に歸せしむるに在り今本宗の行者よく本尊に向て吾身の本

體卽ち十界圓具自他同體の身なることを了知し自他彼此の間に於て苟も物我の隔意を亡泯し愛憎取捨の情執を免離せば喜怒哀樂等の七情の起るも皆その規を越ゆることなく觸向對面みな公正無私の平等心ならざるなくんば此身既に一分佛の境界に入れり後生も亦何ぞ佛身ならざらんや故に宗祖曰く今法華は八敎に越えたるの間なれば速疾頓成にして心と佛と衆生と此三は我一念の心中に攝して心の外に無しと觀ずれば下根の行者尙は一生の中に妙覺の位に入る況や中根の者をや何況や上根をや惣じて一代聖敎は一人の法なれば我身の本體を能々悟るべし之を悟るを佛と云ひ之に迷をば衆生なりと敎へ玉へるなり

夫れ悉達太子は人身より直に進で釋迦牟尼佛となり一天四海を利益せり宗祖善日歷も亦た凡夫より發心頓悟して遂に大菩薩の法位に登り餘光猶は萬年の末に赫耀たり學一例諸とて龍女の成佛は一切の女人の成佛を顯し達多惡人の成佛以一切の惡人の成佛を知らしむるが如く宗祖の成佛は末法の一切衆生の成佛得度の先例をなせるなり堯舜を以て自ら責るは自ら信ずるの至れるなり釋迦宗祖を以て他とせず自ら期するは宗敎信者の本意なるべし況や人は萬物の靈長ならずや但だ一己一身の私利のみ計て敢て他を保護愛養し萬民共樂の道を講究せずんば亦靈長と謂ふ可らず況や吾身の本體は本覺無作の三身如來の身なるを知らず自ら卑劣の凡夫なりと思ひ自暴自棄して大道心を發す能はざるもの之を經に窮子と云へり窮子もと窮子に非ず大富長者の一子なり然るを自ら失脚迷誤して自ら窮子と謂へるなり例へば莊周の夢に胡蝶となるが如し胡蝶豈に莊周の本身ならんや今ま行者も亦た此の如し苟も迷ふて凡夫なりと思ふが故に五欲七情にはだされて愛憎取捨の心を恣にし只だ一身の私利のみに眼をくらまし發悲苦惱に日を送り未來は六道輪廻の惡果を感ずるの迷報を致せる事こそ哀れなれ是等の迷を警覺し救はん爲に先づ本尊を圖して凡夫の本體卽佛身なる事を示して大道心を感起せしむべき大地盤を定めて自暴自棄せる卑劣の妄夢を覺悟せしめば凡身を改めすして妙覺果滿の佛身なることは猶は胡蝶の夢寤めぬれば本の莊周に復するが如く窮子の身とりも直さず長者の子なるが如く舍利弗の身を改めずして華光如來と成るが如きなり故に本尊は衆生成佛の基本を示せるの妙境なりと知るべし

既に吾身全く佛身なるを信得せば念々宜しく佛心卽ち大道心を發し我等本分の大利を求めて自他共樂の眞果を成すべし然るに衆生の散亂なる欲念思惟して之を憶持する事難し故に口業唱題を以て身業受持に代るなり唱題受持は法華立行の妙觀也之を本門の題目と云なり此の題目は釋尊久修の妙法にして法華一經の精要なり苟も能く至心に住して心念口唱せば功德は冥に薰被し利益虛しからず日用常作の際に於て善事にあれ惡事にあれ苦も樂も皆是れ妙法不思議の理道華因果の感應なる者と信じなば縱ひ樂境に遇も敢て之に溺れ耽湎するの誤をなさず不幸にして苦境に於るも苟も免れんとするが如き卑劣心なく苦をば苦と思ひ樂をば樂と思ひ一心清淨に南無妙法蓮華經と唱へ敢て苦樂の二境に心を惱ますず心關に反省の道を求め五欲七情を折伏し四德の佛身を思て本尊に對向し專念口唱し凡劣卑陋の心に陷らざらしむべし若し瞋恚の心盛ならば閑に之を思ふべし本尊既に提婆を列たり抑提婆の墮獄するや瞋恚を不理の境に恣にする故に遂に惡果を感せり亦瞋恚の心を以て猛省勇斷よく三惑の惡障を一掃して速に瞋恚法界の本理に達しぬれば地獄の常體を改めずして天王如來の善報を來せり均しく瞋恚にして地獄佛果の霄壤となせり昔日の提婆は能く瞋恚を御して遂に成佛せり我亦何ぞ能せざらんやと深く之を猛省せば瞋恚に於て自ら身心ともに胖なることを得て夫の物我の際に於て公平無私の本理を見て自他共樂の境に至らんこと難からざるべし豈に但だ瞋なく痴なく容々寂々槁木死灰の如にして方に始て佛陀と謂ふべけんや今ま愚夫愚婦の目に一丁字なき者なりとも至信に住して唱題受持せば亦能く此の佛境の地に至ることを得せしむ之を本門の題目脩行の妙觀とするなり

嗚呼身は本覺無作の佛身也法は久遠本覺の妙覺なり妙境妙智函蓋相應し唱題修行せば念々清淨にして五欲愛染の妄情自ら消滅し自然に本門の妙戒を感得し行住坐臥語默作々皆是れ不思議解脫を得て生老病死憂悲苦惱のなやみなく常樂我淨の妙土を感見する事を得ん所謂受持の行者所住の土卽常寂光土なる者なり故に經に當知是處卽是道場と云へり文の意は法華脩行の處は何の場所なりとも一切みな是れ道場にして佛の住處なりと示せるなり之を本門の戒壇に住せる受持受得の妙果報とするなりされば立正安國論に曰く三界は佛國なり佛國何ぞ衰へんや十方は寶土なり寶土何ぞ壞れんや國に衰微なく土に破壞な

くんば身は是れ安全心は是れ禪定ならんと抑も立正安國は一宗建立の大本なり然れば則本門法華の宗旨は本門三祕の正法を建立して衆生成佛の根基を固くし國土常住の眞理を明にして國家を安穩ならしむ所謂先づ生前を安じて更に沒後を扶けしむと云者なり之を本門法華一宗の大意なりとす

報告會事業報告

第一　追弔會通牒文

北清の擾亂端しなく吾が軍隊出征の已むなきに至り今や列強聯合軍の中に在て先登の名譽を擔ひ軍威國力を顯揚して遺憾なし顧ふに猛暑の炎天敵地に在て軍務に從事す其の苦辛の狀況に至りては想像の及ぶ所にあらず此際戰歿將士を弔ひ傷病兵士を慰問し聊か報國の微意を表せん爲め京都日蓮宗緇素相ひ謀り本會を組織せり依て八月廿六日を期し　村雲尼公殿下の御親敎を仰ぎ本山及び總寺院出席本山頂妙寺に於て戰死者追弔大法會を擧げ廣く義捐金を募り慰問使を特派し親しく軍隊傷兵を慰問し金品を贈與して有形無形共に國民奉公の精神を奮興せしことを江湖に告ぐ云爾

第二　追弔會順次

午前九時より　讀誦會
午後一時より　說教
午後三時より　追吊音樂大法會

僧正　淺井日通殿　本山妙傳寺住職
僧正　工藤日諒殿　本山本滿寺住職
瑞龍寺門跡
御親敎　大僧正　村雲日榮尼公殿下

第三　追吊會重要記事

一　戰況幻燈會開設

八月廿二日廿三日兩夜本會の主旨に由り世人の國家及び軍隊に對する國民の聲援を奬勵せん爲め本宗特任布敎師中尤も斯道に巧みなる井筒是寛師を招き特に東京より北淸戰況撮映を購求し京都中心たる新京極劇場夷座に於て開設し本會々員及本宗有力者へ入場券を配布せり其盛擧は近來の一大美事にして市内一時風評嘖々たり

二　追弔會法會現況

佛前戰死者の靈牌幷に大沽戰死故服部中佐の眞影を安し燈花供物殿そかに堂前又餘の塔婆を建て書するに北淸擾亂戰歿將士忠魂菩提とし供ふるに淸水青葉を以てせり法會定刻前より山内堂裡群衆山をなせり別して御會追弔會には大本山妙顯寺住職僧正河合日辰師大導師となり本山寺院二百餘名を率ひ昇堂別て本山本滿寺住職僧正工藤日諒師悲想且つ嚴肅なる追弔文を朗讀せり滿堂爲に眠ひるが如し參拜燒香の重なる人は第三十九聯々隊長石山正珍故服部中佐の令姉遺族二名舊縁者とし先の伏見町長築山三郎兵衛市名與員等なり

三　村雲宮御親敎々報

山内大乘院を以て御休息所に充つ爲めに前來同院檀中二三有力家當院の名譽とし修理を加へ裝飾至美全く本會の思はざる幸ひにして大に面目を施せり午後三時軍隊奏樂と共に御臨場直に堂内一隅に小女唱歌會の唱歌を以て御登座を衞り御親敎約一時余御熱誠に安國の大義に因し自界他國反逆の二難の關係より現時戰爭の他國に在ると自國に受くるとの利害より國民の聲援の軍隊の勢威を倍加する事實例證を詳說遊ばされ滿堂隨喜の涙に咽ぶ

第四　慰問使派遣通牒文

北淸事變以來已に四閱月攻城野戰も亦少からず況や三伏の炎天傷病兵士千を以て數ふるに至る然りと雖ども聯合軍の協力千辛萬苦の中に公使救援の目的を達せり其間吾軍は恒に攻擊の衝に在て列國の囑望に負かず北進軍主動の大任を完ふせり豈亦盛事ならずや其功勞を安慰し國民の聲援を表するは本會目的の主にして刻下の最大急務たり因て爰に戰歿將士の追弔會を修し尙ほ今回慰問正副四使を特派し親しく軍隊傷病兵士

を慰問し本會々員の篤志義捐を以て金品を贈與して本會の主旨たる奉公の萬一に報い
本會會員の精神を貫かんことを期す

第五　慰問使人名

慰問正使　本山總代　立本寺住職　僧正　池上日晉

同　副使　寺院總代　通妙寺住職　大僧都　豐田心靜

同　正使隨員　大妙寺住職　大講師　嶋田元秀

同　會員總代　市會議員　中孫三郎

常轉法輪　立正安國
寶祚萬歲　庶民快樂

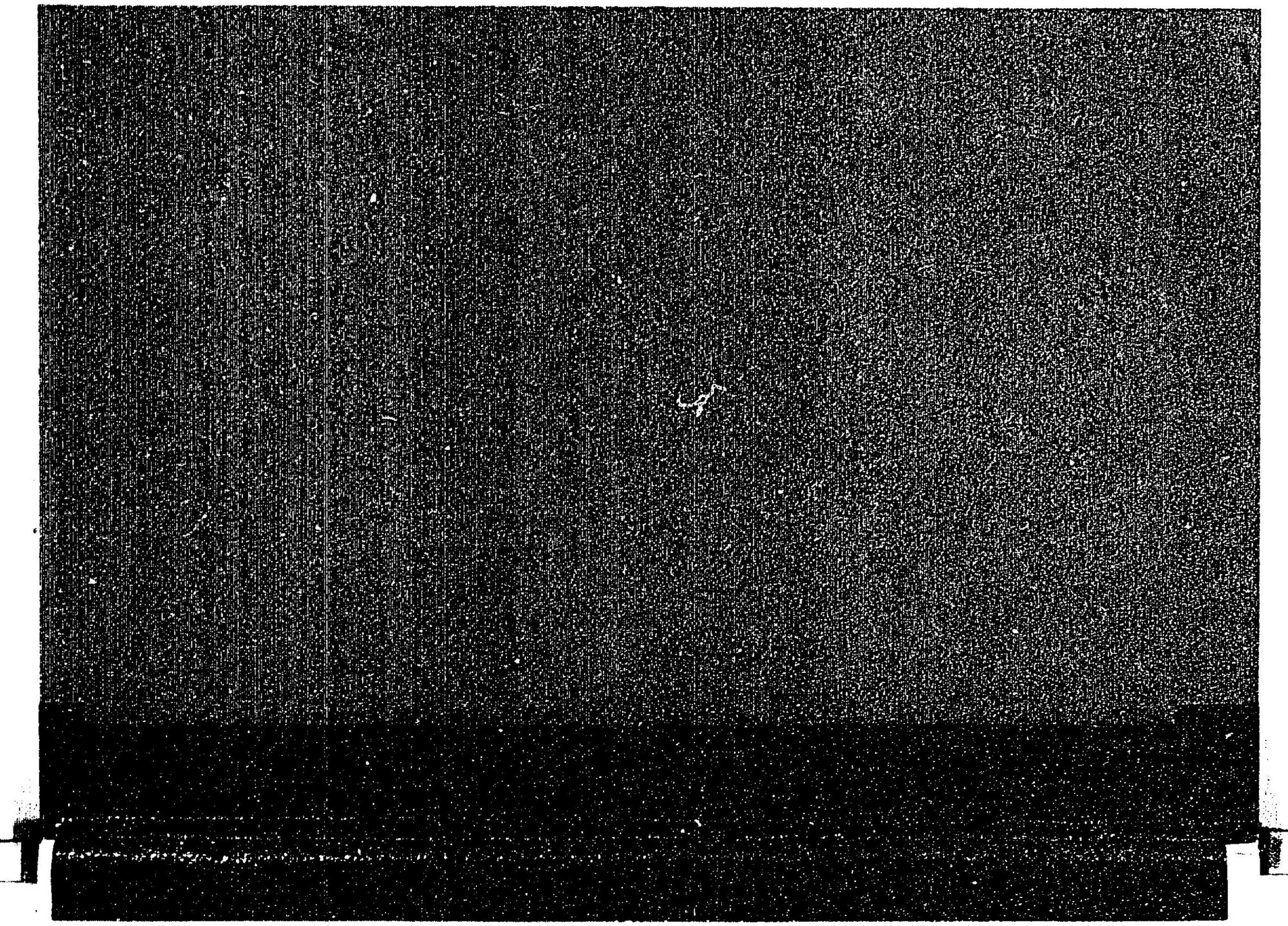
A-49

明治三十三年九月十五日印刷
明治三十三年九月十八日發行

京都市下京區五條橋東六丁目鳥邊山
通妙寺住職
編輯兼發行人　豐田心靜

京都市上京區小川頭寺ノ內妙顯寺前町
大妙寺住職
印刷人　島田元秀

京都市寺町通三條上ル
印刷所　四日市印刷株式會社京都支社



日蓮宗大意

国立国会図書館

020032-000-0

特47-787

日蓮宗大意

日蓮宗報告会

M33. 9

ABH-0227